

(大腿)骨頭すべり症について

<p>(大腿)骨頭すべり症</p>	<p>◇症状</p> <p>外力により力学的弱点である骨端線がずれることを骨端線損傷(こつたんせんそんしょう)と呼ぶが、とくに股関節に近い大腿骨頭の骨端線がずれる病態を、大腿骨頭すべり症と呼ぶ。</p> <p>この病気は、骨成長の最終段階に発症しやすい、慢性に経過する例があり、診断および治療が難しいなどの特徴をもっている。外傷の影響がはっきりしており、症状の出現時期が明らかな急性の経過をとる場合と、日常動作や比較的軽微な外力により骨端線が障害されて発症時期がはっきりせず、慢性の経過をたどる場合とがある。</p> <p>多くは、10代前半の男児に発生する。また、ホルモンバランスが悪い肥満傾向の小児は骨端線の成長終了が遅れ、強度が弱いため、大腿骨頭すべり症が発生することがある。</p> <p>股関節の近くの骨端線がずれて変形するため、痛みや関節の動きの異常、跛行(はこう)(歩行の障害)が現れる。慢性に経過すると痛みが著しくないことが多く、長い期間、大腿骨頭すべり症の診断がつかない場合がある。</p> <p>◇治療</p> <p>治療の方法は急性と慢性で異なる。急性にずれが生じた大腿骨頭すべり症では、痛みが強いため比較的診断がつきやすく、診断がつきしだい入院になる。急性に生じたずれは、牽引(けんいん)療法や麻酔をかけたうえで整復(骨折、脱臼、骨端線損傷のずれをもどす)することが可能。ずれをもどしたのちに、また再びずれを生じないように骨端線を貫くように針金やスクリューで固定して、骨成長が終了したあとにくぎ抜きを行う。</p> <p>一方、慢性の場合は長い経過でずれが生じており、痛みは激しくないため診断が難しいことは前述したとおりである。また、骨端線のずれをもどす整復術は困難。骨端線の変形が著しい場合には骨切り術を行い、変形により股関節の動きの異常が出ないように治療する。骨切り術後の金属を骨成長終了後に抜くことは急性と同様である。</p> <p>大腿骨頭すべり症は小児の成長期の病気であり、正確に整復された場合には、骨成長が終了したあとに障害が発生することはない。</p> <p>(GooヘルスケアHPより 筆者:柳本 繁)</p>	<p>gooヘルスケア health.goo.ne.jp/medical/search/10980900.html</p>
-------------------	---	---